

山と博物館

第42巻 第2号 1997年2月25日

大町山岳博物館



フランツヨゼフヘーエ展望台から見たバステルツェ氷河

アルプスナンバーワン 沢 弥生

ヨーロッパのオーストリアは、アルプス山系の一国で大陸のはば中央に位置する。特に南部に伸びるアルプス連峰はグロースグロッカナーが主峰で国内の最高峰（三七九八メートル）。広い地域にわたつて万年雪と氷におおわれ、このアルプスから源を発しているドナウ川は西から東を貫流し、国内延長三五〇キロメートルに及んでいる。

自然の美しさを背景とした国で、多くの芸術家が住み優れた作品が生まれ、一三世紀から今世纪初頭までの約七〇〇年間にわたつて統治したハブルグ家の君主たちは例外なく狩猟を好み、アルプスの森林に出かけたり山登りにも興じた。

王朝の発展を遂げたのは一五世紀後半にマキシミリアン一世即位以来のことであり、四方を山々に囲まれたインスブルックは以後彼の施策の中心となる貴重な都市となつた。王はこの美しい山間の都市をとりわけ愛し、湖で魚つりをしたりカモシカ猟を好んだ。何よりも当地の山系から産出される銀・銅・塩のためだつた。そこから上がる収益は莫大で、年間百万グルデンは下らない収益をもたらし、やがてマキシミリアンの軍隊の経費として用いられることになつた。ハブルグ家はもともと小貴族の出身にすぎなかつたが、恵まれた自然と結婚政策が大成功を収めたことは有名で子孫代々、脈々と君主の地位をアルプスの岩のよ

うに継承し続けてきた。

実質的には最後の皇帝に着いたフランツヨゼフは一八三〇年生まれ、あざやかな容姿の秀でた貴公子も少年時代から獵や乗馬、登山に熱中した。東アルプス最大の氷河バステルツェは長さ一〇キロメートル、面積三〇平方キロメートルでグロースグロッカナーに近く輝いている。このすぐ近くにかつて皇帝が徒步で到達したフランツヨゼフヘーエ展望台があり、付近の草地には愛くるしいアルプスマーモットが遊んでいる。現在は一九三五年より五年の歳月をかけて完成したグロースグロッカナー山岳道路が通じ、アルプスナンバーワンの絶景で世界の人々が一度は訪れて見たいところとなつてゐる。

黒部に生きて(一)曾根原文平

はじめに

大町市在住の曾根原文平さん(八十一歳)は、大正四年、屋号「カクヨ」の五男として生まれ、旧制大町中学校を卒業後、野戦銃砲第九連隊を経て満鉄(旧南滿州鉄道株式会社)へ入社しました。終戦を満州で迎え、故郷大町へ引揚げたのは昭和二十一年十月のことでした。敗戦、失意の日々。そんな折り、兄に誘われて鹿島川で初めてイワナを釣つたことがきっかけでイワナ専門の職漁の道を歩むことになりました。

これは平成九年一月二十一日に大町山岳博物館においてお話をいただいた内容を編集し、黒部最後の職漁者の記録です。

山河あり:

戦争が終わったのは昭和二十年の八月だけでも、大町に帰ってきたのは十月だったのです。大町には生まれた家があつてね、跡をとつて兄貴がおつたで、そこへ転がり込んだんです。百姓やつとて米もあつたもんで、一応はそこで居食はできたわけですよ。普通の家だったら家族が増えたら大変な時代だったですよ。その点は割合と恵まれておつたわけです。

それでも自分で自分の生活はしていかないこともやつたけど、結局儲からないんですよね。子供も一人連れとつたし、いろいろハンディがあつて、体一つで稼ぐつてことができなかつた。今考えると半分はもう終戦のショックで、どうでもいいつていうヤケな気



曾根原 文平さん

持ちがあつたじゃないですかな。

私の二番目の兄は小間物とか、釣り具なんかの店を大町の八日町に出しつつ、もちろん釣りも好きだつたんだがね、そんな私を見かねたと思うんですが「魚釣りいかんか」と言つてくれて、鹿島川へイワナ釣りに行つたのが始まりなんですよ。

生まれたのは大町だから、中学生時代に魚釣つた覚えはあるんですよ。その時分にマスやサケの系統だつたんだがね、私たちはアメウオって呼んでたがヤマメみたいな魚、それが農具川じや釣れたんです。それでもイワナ釣るつてことは知らなかつた。

兄貴から道具をもらつてね、竿や毛バリね。その毛バリを浮かべて釣るんだ。そうすつと下から魚が飛び上がつてきてそれをくわえることができなかつた。今考えると半分はもう終戦のショックで、どうでもいいつていうヤケな気

職漁こと始め

生まれたのは大町だから、中学生時代に魚釣つた覚えはあるんですよ。その時分にマスやサケの系統だつたんだがね、私たちはアメウオって呼んでたがヤマメみたいな魚、それが農具川じや釣れたんです。それでもイワナ釣るつてことは知らなかつた。

そこで、弟と一緒に「どうせやるならやる」と決めて、竿と毛バリを買つて、大町で魚を売るつてことになると、まあ料理屋ですけどね、「イワナ釣つてきたが買つてくれんか」なんてなかなか言えないんですよ。これはサラリーマンの素性ですよね。

それで、「どこいって売りやいいだ」と兄貴に聞いたら、今は無くなつてしまつた神栄町の「寿美よし」に、もと親戚筋の店で働いていた料理人がいて兄貴達と顔なじみだつたから、「話しくて、持つていけよ」と言われ

に入った。魚もいたが、淵つてものは普通ね、

ただつ立つて毛バリ投げ込んで出てこないんですよ。向こうが人間の姿見てしまえば、絶対出ないんです。ところがね、当時の魚は二度も三度も飛びつくんだよ、下から来て。おつ、これはおもしれえもんだなあと思つて、初めてだもんでね、また出たりやせんかまた出たりやせんかと、三十分もね一時間もその淵動かなんでやつてた。兄貴が釣り上つてつて、一時間経つても私が来ないから、戻つて來た。

「おまえ同じ淵にいたつてダメだ、いつべん出て釣り損なつたら、こすくなつてて(警戒して)釣れないから、別などこいつてやるんだ」と教わつてね、そうやってイワナ釣りを覚えた。

結局他にやることもなかつたし、頭冷やすのにね、谷川の瀬音を聞いたり、空気を吸つたり、景色を見たりしているのがよかつたですよね。それで病みつきになつて、大谷原まで毎日歩いて釣りに行つたですよ。バカなものでね、猫鼻辺り(現爺ヶ岳スキー場近く)の鹿島川でも、いくらでも釣れたんですけども、やっぱし教わつた所しかわからんからね、いつもそこへ行つたんですよ。

そういうこうやつているうちにだんだんとコツ

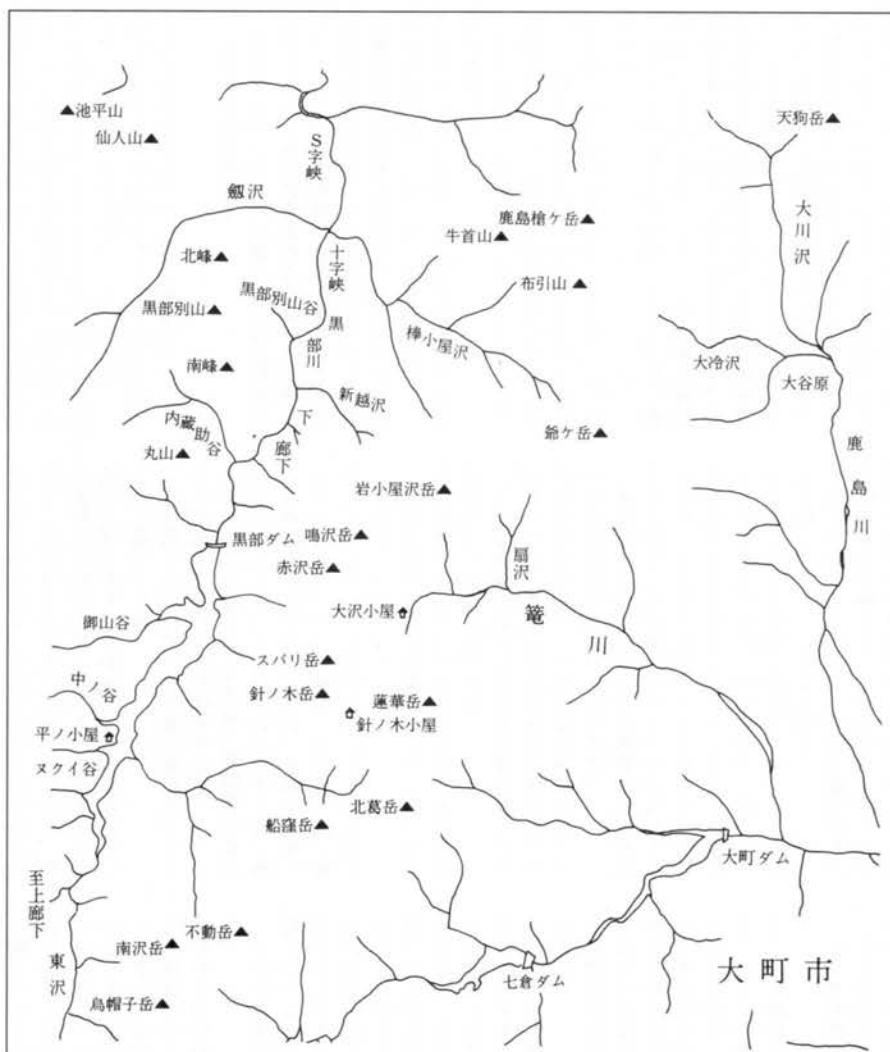
黒部谷
何年かやるうちに、釣り友達も相当できてね、そのうちに黒部へ行つてみんかという話



平の小屋(現在)

て寿美よしに行つたんですよ。
ところがね、何にも知らないから玄関から入つて、イワナ釣つてきたがいらんかね。出てきた女将さんに笑われましたよ。普通物売りは勝手口から入るつてことも知らないつたんですよ。

寿美よしさんは、それからいつでも買ってくれたですよ。そのころはね、まだ混乱しているから大町まで生魚とか、塩魚売りに来る人が少なかつたですよ。だから料理屋には、いつでも一匹でも二匹でもいいから持つて来てくれと言われて、気楽になつたっていうか、商売にしてもいいかなという気になつたでぱり買つてくれたですよ。



黒部周辺概略図

富士弥さんとの出会い
七月に行つて様子は分かつているから、釣らないで平から直に御山谷の小屋へ行つたんです。そしたらね、四、五人いるんですよ、小屋に。いろいろ話したらね「こんなところに来つて泊めねぞつて、小屋の親父が怒つた。どうすりやいいだか、これでへえ帰らつと思つてる」って言う。その親父が遠山富士弥さんだつたわけ。

そんなばかなことはないと小屋に入つてみたん

が出た。二十三年の七月ですよ。同級生と二人で一週間ぐらいの予定で初めて黒部へ入つたんですよ。

ルートは、大出（現大町市平大出）までバスで行つてね、後はとにかく歩き通してその日は大沢泊まり。翌朝早く針ノ木峠越え。寝具から何から一週間分背負つてあるから、三十キロぐらいはあった。三時間登つて峠、それから針ノ木谷を四時間半下つて黒部川の平ですわ。平には小屋があつたんだが、小

屋には人が居て泊まり賃取ると思ってたんでしたよ。平から五百メートルくらい下つた河原で野宿でした。翌日本流を釣り下つて行くと、平には荒れててね、道なんて形はひとつもなかつた。釣つて行つて、片方が悪くて通れ

ていう立山から出ている沢があるんですけど、そこに、日電（日本電力）の小屋つていうのがあつた。建てたのは昭和七年ころだというけれど、平との間にあつた道も私たちが行つた時には荒れててね、道なんて形はひとつもなかつた。釣つて行つて、片方が悪くて通れ

屋には人が居て泊まり賃取ると思ってたんですね。野宿しようやつてことで、平から五百メートルくらい下つた河原で野宿でした。翌日本流を釣り下つて行くと、平には荒れててね、道なんて形はひとつもなかつた。釣つて行つて、片方が悪くて通れ

ていう立山から出ている沢があるんですけど、そこに、日電（日本電力）の小屋つていうのがあつた。建てたのは昭和七年ころだというけれど、平との間にあつた道も私たちが行つた時には荒れててね、道なんて形はひとつもなかつた。釣つて行つて、片方が悪くて通れ

ていう立山から出ている沢があるんですけど、そこに、日電（日本電力）の小屋つていうのがあつた。建てたのは昭和七年ころだというけれど、平との間にあつた道も私たちが行つた時には荒れててね、道なんて形はひとつもなかつた。釣つて行つて、片方が悪くて通れ

なかなか遠浅の所を見つけて何度も渡り返してね。小屋に三日くらい泊まつたでしょうかね。相当釣つたが、処理の仕方を知らなかつた。これは難しいもんだと、黒部で魚釣つて大町へ持つて来れば売れるんですがね、どうやつて持つて来るかすごく悩みましたよ。まあ昨日釣つて今日持つて来たやつならなんとか食えましたね。それで兄貴たちに聞いたら、塩を混ぜたコヌカの中に入れて来りやいという話で、二十三年の八月にお盆に半生のコヌカを持って、今度は一人で黒部へ行つたんですよ。

富士弥さんは、冬はカモシカ猟をやつとつて、兄貴が毛皮なんか買つとつたからね、私も富士弥さんの名は知つてた。それに私が学生のころ、昭和七年に針ノ木越えて立山登山した時にね富士弥さんの小屋へ泊めてもらつたことがあつたんですよ。だからね、人の言う話と違つて、とてもおとなしい人だ、いい人だという印象が先にあつた。もちろん私たちは子供だつたあの人は大人で、頼んだら「おおいいよ泊まつてけ」って、川向こうに平の小屋はあつたけど、こつち側（信州側）に富士弥さんの小屋あつたもんで、じゃあここへ泊めてもらえやといふことで、頼んだら「おおいいよ泊まつてけ」って仲間四人で泊めてもらつたわけですよ。まあそういうこともあつたもんで、大町のことだ何だ話してたら、一緒に組んで釣りやらんか、ということになつた。当時富士弥さんは六十一歳くらいだったが、こつちとしてケンカするよりはいいからね。よしと、一

緒にやりや効率がいいじゃないかと話がまつた。あの人はもう幾日来とったかね、三升ばかり出し合ってやろうと話を出してきたが、私は四升か五升持つて来てたんで、一緒にやるなら米を全部合わせて、食えるだけ二人でやろうって言つたら、喜んだ。

イワナを焼き枯らす

釣ることはできるけど他のことは全然知らないんだね、魚の処理法なんかは。まず串でしょ。三十センチの魚だつたら串は六十七センチはあるんだよね。うんと長いですよ。囲炉裏の灰に刺す刺し代つて十五センチぐらいいいるからね。それくらいの長さの串がちよどいわけですよ。大小みんなそれでおさまるわけだし。

イワナははらわたは出しているから、口から通してね、しつぽの肉のあるところだけにぎゅつと刺すんですよ。その刺さる分だけ串の先を細く削つとけは後は太くても何でもいいわけだ。

はらわたの出し方だがね、あの人はね、肥後守つてやつあるじゃない、鉛筆削る時使いう切れ味がいい小刀。富士弥さんはあれで肛門からスースと喉元まで切つてね、親指をつっこんで簡単に出しちゃうんですよ。「おやつ、親指どこに突つ込むだ」と聞いたら、「胃袋の下へつっこみやあいいんだ」。食道やエラがくつついでいるところを親指の先でちぎつてやつて、初めてだからなかなか取れないの。途中で切れちゃうんですね。

はらわたは捨てない。食道があつて、胃袋が曲がつて、魚の胃袋つていうのはこれだけのものなんです。その胃袋の曲がつたところに刃を入れると、つまつて食べる餌が全部ころんと出るんですよ。それを出しておいてどうするかといふと、火棚の下にぶら下げた缶カラがあつて、ここへ塩水を入れてガーフと煮えてきたら、そこへはらわたをごそつたらね、富士弥さんが売りに行くぞつてわ

と入れるんですよ。そして魚焼く串でかき回して、次にワーッと煮え立つたら外して、笹の皮編んで作ったスノコの上に全部並べて火棚へ上げておく。下からずっと火を焚いているから乾いてくる。

富士弥さんと出会った最初の晩にそういうことを見せてもらったわけですよね。

タバ干したはらわたはね、翌朝食べるところを見せてもらつたわけですね。

「しこらしこら」としてうまいんですね。海の貝の干したやつみたいでね。それと「ゆ」つていうやつ、苦い胆嚢ね、あれも全部一緒になんですね。あれは腹の葉にもなるんです。

魚は腹側から焼けつて言うからね、火に腹向けて並べていくんですね。

このときね、腹びれは交互に体を抱くようにくつつけ、残りのひれはみんな体にくつつけちゃうんですよ。そうすると製品になつてからうんと見たとこいいんですね。

あぶりはじめで少したつと魚体に粘りが出てくるから、その時ひれをくつつけちゃうわけです。どんどん火が燃えてるからね、ついい切れ味をはずしちゃう。まだいいと思つてゐるうちにもうくつつかない、乾いちやつてね。また水や唾で濡らしてヌルヌルを出していくんですね。

頭が下向いてるでしょ、だから最初はとつと水が滴り落ちる。この水がね、垂れきれば濃い脂みたいなのが鼻先に溜まつて落ちなくなるんですよ。これが腹の焼き終わりせり。今度はひっくり返して背中を焼く。これでだいたい火が通るから、後は火棚に乗せて乾かすんですね。

火棚はねネズコの薄板でてきててね、一メートルの一・三メートルくらいの大きさで三段になつてた。焼けたら一番下の段に並べるんですね。翌日は一段目上升げく式で、三段目を持つていくこになりやもう相当乾いちゃうんですよ。

胸びれの上、頭の後ろが一番肉が厚いから、

富士弥さんはそこを押してみるんです。へこまなんだらいい、へこんだらまだ乾いていないからダメなんです。棚へ上げて、そこがへつこまなくなつたら、下ろしてみんなためつこまなくなつたら、下ろしてみんなためつこまなくなつたら、下ろしてみんなためつこまなくなつたら、下ろしてみんなためつことおけばいいんです。ガラガラやつてもね、ヒレがくつついてるからクズがでないんですね。

イワナの体はね、煙で干されているから金色になつてます。これで製品のでき上がりなんですね。よく干さないと売りに行つてしまふ方が知つてて、「魚屋さん、出来が悪い」と言われる。生乾きのイワナをいつべん買った人はもう買わない。カビがふいちゃうわけだよ。私たちやつはね、ちゃんとした缶カラ入れておけば翌年でもカビふかない。土産物屋なんかはね、次の夏にまた出しても売れるんです。製品に対する信用が大切なんですね。

薪は皮のむけた流木。まあ近くに流木がなくなつてくるとハンノキを切つて使つたがね。柳や唐松なんかもちよつとは混ざつていたかな。柳は煙りが黒くなつてダメだしね、唐松も煙は黒いし、跳ねる。唐松には脂袋があつて、パンツ一枚で焼いてるでしょ、ビーン、ビーンと跳ねて熱いんですね。

イワナを売る

そつやつて二週間ぐらい一緒に釣つたじゃないですか。四升の米も食い延ばしすれば、しただけ儲けにつながる。歴然としてるんですよ。一日で二百匹は釣るんだからね、一匹四十円くらいで売れたから二百匹釣りや八千円でしょ、大きいですよ。どうしても金勘定になるからね。米を切りつめようと、ろくに飯を食つてないから、終いには岸辺で砂に埋まつた足を抜くにも、よいしょつてやらなきや上がれないんですよ。

富士弥さんとの出会いはね、私は運が良かったんだね。富士弥さんがいるつてこと知らないんで御山谷へ行つて、たまたまそこにいた人が富士弥さんでね、一緒に組んだおかげにイワナの処理から売り方まで全部教わつたわけですよ。いい人に行き会うことができた。私の一番の生活の恩人ですよね。

岩小屋生活、そして黒部との別れ

まあこんなことでずつと釣つてきたわけですが、あれは一人で始めた次の年、昭和二十六年六月のことです。御山谷の小屋に着い

けだ。南安曇の白骨温泉から、上高地へね。

富士弥さんは三俣蓮華の小屋にいてね、山賊つていわれたこともあるんですよ。薬師岳の方の黒部の源流でイワナ釣つて、上高地へ何年か売つとつたらいいんですよ。だから売り先を知つて、行けば顔なじみでね。白骨の新家へ寄ると、亭主がね「魚屋さん、よく来ててくれた」と、買つてくれるんですよ。それから今日はうちに泊まつてくれますから、それで聞かれてね、宿屋はタダなんですよね。

魚買ってくれてタダで泊めてくれて、あんな配給時代に酒まで出してくれたんですよ。白骨はね新家と本家の二件しかなかつたけど、本家もやつぱり親切にしてくれましたね。

それから今度は上高地ですよ。五千尺旅館があるが、富士弥さんは「まあここは買わねえよ、漁師を雇つて生でお客さんに出してもいい」と、上高地で買つたのは温泉旅館。ここは買つたです。その

若い店長みたいな人を知つててね、そこにも泊まつた。帰りは中ノ湯とかの温泉に寄つて、だいたいみんな売つちやつたんですよ。

富士弥さんは子供があるのにね、どうして私に売り先まで教えてくれたかね。あの人はもう一年か二年やりやあ終わりだつていう限界を知つててそうしただけね。なにしろ普通、商売先までは教えないですよね。

たら、ドヤドヤッと関西電力の測量の連中が来てね、「出てつてくれりよ」と言われた。

「出でけつたって、おまえたちは何者だ」と聞いた。「関西電力だ」と。『関電にこの小屋を使う権利は無いじゃないか』。そしたら小屋は営林署のものでね、新しいダム（黒四）を作るための測量に営林署から借りて来たと言うんだ。

「部屋はいくつもあるから、いるならいてもいい、だがこっちは大勢だあんたも困るだろう」と言われた。

こりやいかんと、富士弥さんから何か拍子に、御山谷の下流にいい岩屋があるって聞いていたのを思い出して、探しに来た。御山谷の沢を渡つて川端歩いてくと、四メートルか五メートルのちよつとした土手があつたんですよ。そこへ上がつてみたら、大きな岩が見ええてその下が空いてた。ああのことだなと思つたね。

何でも小屋のもの持つてけつて言うんですね、畠二枚人夫に背負わせてね、もらつてきて、鉄棒があつたもんでね、それで中のゴロゴロしてゐる岩をみんな出して四疊半くらいの部屋にしたんですよ。カーバイトの空き缶で、入り口の屋根葺いて、戸口にムシロを吊した。小屋は焼かれちゃつてたんですよ。富山のやつに。平の小屋には佐伯覚榮さんがおつたし水が岩伝たつて漏つてきて、せつかく乾かした魚がびしょ濡になつちゃつた。岩小屋つてものはダメなんだね。これをどうやつて防ぐか骨折つたですよ。火を焚いて岩が乾燥してきたらずつと毎日焚くんです。これで少々の雨なら漏れなくなつた。

こんなとこじや儲けにならねえわなと思つたですが、仕方ないですね。一人のことだから、気分がのつてくれればいいんだが、最初の五日くらいは嫌だ嫌だ、帰ろう帰ろうと思ふですよ。米もあつたし麺も持つてつたんで、小屋の桶持ち出して、濁酒造つて一人で飲んだのですよ。いい具合にできてね。それで気持ち紛らしてね。でもそのうちに慣れきて、今度は釣るのが面白くなつて、もう

鼻歌混じりで毎日が過ぎていく。

私が落ち込んでる時に、測量の連中は私が釣つて後先で勝手勝手に釣るでしょ、まあ嫌だくなつちやつてね。「俺は商売でやつてるんだから、邪魔するな、下手に俺の邪魔すりや後ろから突き落とすでな」と脅しかけた。

二十人くらいいたのにね。

連中は釣り落としも多いんですよ。お前たち釣つてどうするだ、焼いて食うだからって聞いたら、いや食つたり食わなんたりだつて言う。何でもいいわ一匹十円で買うから持つてこいつつことになつた。

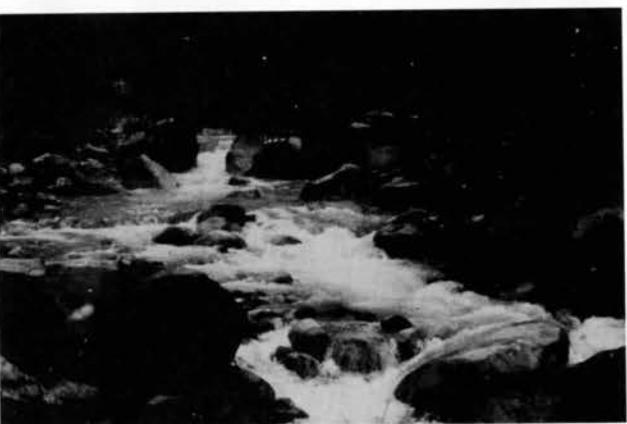
現金は持つていなんですよ。ダム調査に来た東京のインテリの連中が、土産にするから売つてくれつて言うから、一杯ふっかけて売つてやつた。その錢が五千円あつたんですよ。そういうこともやつたんですよ。

結局ね、もうそんな連中がいればね、何しでもかにしても邪魔されちゃつてダメだつた。これはもう黒部の釣りはダメだと思つた。

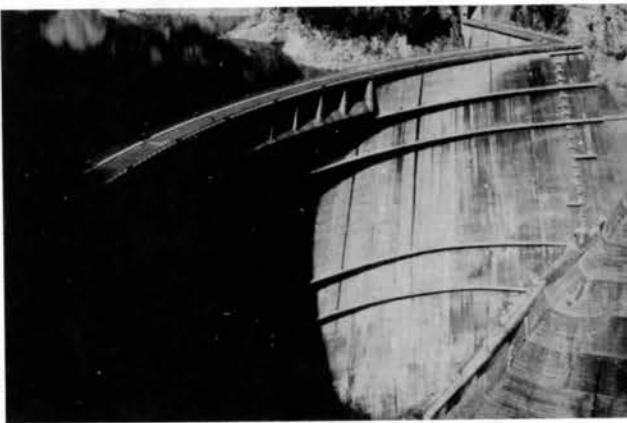
次の年もね、嫌々行つたら、私の作った岩小屋は焼かれちゃつてたんですよ。富山のやつに。平の小屋には佐伯覚榮さんがおつたし雪入らないように蓋をして、木の高いところにぶら下げておいたんだが、なんともなかつたね。あの辺は雪深いから相当高いところにぶら下げないと、埋まっちゃう。雪に埋まる、と水吸い上げちゃうからね。東沢は二十八年、二十九年もやつたけど、あまり良くなかったね。

それから、三十一年か二年ころだつたか、『白い山脈』っていう映画撮りに来た連中がね、クマやキツネなんかのね口ををすると言ふんだよ。どうだ、と関電に言われて、行くよになつちやつたですよ、ダムができるたどりをやつたこともありました。

その間にもね、黒四ダムの工事が進んでイワナも釣れなくなつたもんだから、関電があると言われたが



東沢



黒部ダム

償しろつて言つたんですよ。関電に呼ばれて行って、どんな製品だつて聞くもんでね、東沢で釣つたイワナを二貫目（七・五キログラム）持ち込んでね、これで六千円だつて言つた。そしたらそんなもの高いつて言つたね。

高いつて、みんな売れたんだよ、これ六千円で売れて年間十八万円だつたら、向こう二十年で三百六十万円だが、あんたたち補償してくれるかつてまでは言つたけど、はつきり強くは言えなんだ。その時ね、内容証明で郵送されてきて思つたんだがね。なかなかできなんだ。

東沢で山小屋やろうかつて気持ちもあったね、ちょうどそのころ、昔私が中国の大連でやつてた船の仕事の口が横浜にあつて、声がかかつたんですよ。外国の貨物を扱う特殊な仕事なんでね、要領を知らなければ扱えないんですよ。

東沢で山小屋やろうかつて気持ちもあったでね、家族会議開いたら三対一で否決せ。みんな横浜行つた方がいいつてわけだ。それで行つちやつたんですよ。三十年に横浜行つて、もうそれで黒部とは縁が切れちやつた定年なつてからね、大町に帰つてきて暮らす様になつたですがね。

（つづく）

訂正とお詫び

第42巻1号に掲載されました表紙文章の著者の氏名に誤りがありました。高橋龍之助氏に訂正させて頂くとともに、お詫びします。

部川第三発電所）で仕事があると言われたが

里におりたライチヨウ

ライチヨウは中部山岳の高山帯に生息し、渡りと呼ばれるような遠距離の移動はみられない鳥である。厳しい冬も高山で過ごすが、冬の生活は解明されていない部分が多く、夏と変わらない地域で冬を越す個体群がある一方、夏の生息地域を離れて冬を越す個体群など、エサとなる植物などの環境によつて生活の場所を変えているようである。

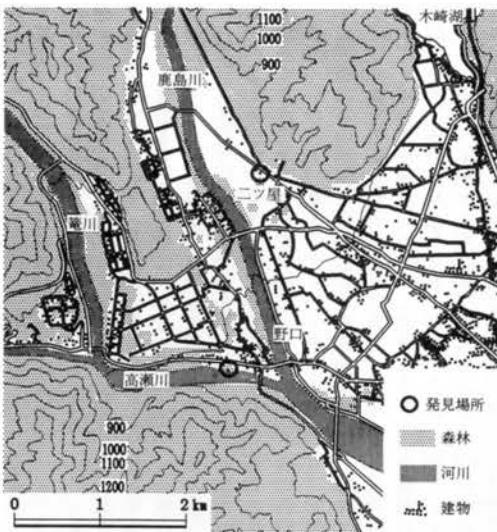
大町山岳博物館には標高一〇〇〇メートル以下でライチヨウが発見された記録が二例あり、その事例をここに述べる。

一九六六年（昭和四一）年一月三日に大町市平二ツ屋（標高八二五メートル）でライチヨウが発見された記録がある。長野県教育委員会へ報告された内容はおおむね次のようである。

アカマツの枝で休むライチョウ(1988年3月17日)



ライチョウが発見された林(1988年3月18日)



一時四〇分に博物館の職員がオスのライチョウであることを確認し、一八時四五分まで観察を続行した。観察中この林から出ることなく、地上におりることもなかつた。アカマツの枝間に移動する行動と、時々アカマツの葉や枝をつつく行動が見られた。

翌朝五時三〇分から調査を開始したが、ライチヨウの姿、声の確認はできなかつた。二例の里におりたライチヨウは共にオスの個体であり、ライチヨウの社会構造が大きく変化する時期である。

二月中旬はオス間の対峙や威嚇が見られる前である。対峙や威嚇はやがてオス同士の追いかけや争いに発展し、あるエリアの順位が決定され、ナワバリが形成されるのである。残念ながらライチョウの冬の生活がまだ充分に解明されていないので、これらの事例が何を意味するものなのかよくわからない。しかし、ライチョウのまだ知られてない生活の一部分を見ることができた。

単位が崩壊し、オスとメスの群、オスの群、単独の個体などのグループが形成され、冬を迎えるところである。

1000

100

支那の風景

卷之三

8

8 3 18

卷之三